

春 告 草

第40号 平成28年10月5日 進路指導部発行

2020年入試に向け、新方式入試が始まる センター試験まで104日

2020年には大学入試センター試験に代わる「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が始まる。その前年には「高等学校基礎学力テスト（仮称）」が行われるが、対象は現在の（中等）2年生。2023年以降、次期学習指導要領の実施を踏まえた上での本格実施となるので、今年の入試には関係ないと思いたいところだが、各大学の推薦入試や一般入試では、今回の一連の改革案を可能な限り盛り込むことともされている。2020年への足音が聞こえる中、新方式の入試を始める大学も出てきている。早稲田大学人間科学部では次年度よりFACT選抜を人間科学部で実施する。新方式の入試から伺える未来へ向けての学びのヒントを探ってみたい。

早稲田大学人間科学部 FACT選抜とは

バターを片面に塗ったトーストを70cmほどの高さの机から落とすと、着地面はバターを塗った面になることが多い。このことの科学的根拠をシュミレーション実験などで考える——こんなユニークな事前課題に挑戦することから始まるのが、早稲田大学人間科学部が今年から実施する（2017年度入学者対象）公募制学校推薦入試FACT（ファクト）選抜だ。

FACTは、早稲田大学の中長期計画をまとめた「Waseda Vision 150」に示されている入試制度の抜本的改革を受け、人間科学部が独自に開発した選抜方式。7月に公開された2017年度選考に向けての事前課題（一次選考）では、実験を3つ行わせ、これについてレポートを作成し提出する。二次選考では論述試験と面接が行われ、論述試験サンプル（6月公開）では3つの大問に対して、文章での説明や図示が求められている。

FACTは「Fundamental Academic Competency Test（学術研究のための基礎的な能力をみるテスト）」の略で、人間科学部における学びに必要とされる能力を測定することを目的としている。具体的に評価するのは「CLEARする力」。すなわち、対話の力（Communication）、論理の力（Logic）、表現の力（Expression）、分析の力（Analysis）、省察の力（Reflection）で、21世紀型学力とも言われる汎用的な力、そしてその背後にある学ぶための力、生きるための力が問われているのだ。

■出願要件など

【公募制学校推薦】のため、出願には学校長の推薦が必要だが、学校ごとの応募者の人数制限はなく、幅広く人材を集めたいと考えているようだ。

出願要件は、高1（中等4年）から高3（中等6年）の1学期までの評定平均値が3.9以上であることに加え、理科と国語については両教科とも3教科以上の履修が必要で、さらに理科と国語の評定平均値が4.3以上であることも求められます。また、外国語能力に関しては、英検、TOEIC、GTECなどの外国語資格・検定試験のいずれか1つのスコア、結果の提出が求められる。基準点は設けていないが、大学入学日から遡って2年以内であることが条件である。

■入学後の伸びしろが評価される

先に説明したように、選考は2段階で行われるが、「事前課題」と「論述試験」が連動しているのが大きな特徴。

「事前課題」は一般的な小論文とは違い、身近な現象などを観察、記録、考察してレポートにまとめるもの。文系・理系、既習・未習を問わず、多様な手段を駆使して課題解決を図る力をみるのが狙いである。

すでに「事前課題」も掲出、
11月からいよいよ出願開始

今年度の出願期間は11月1日（火）～7日（月）。一次選考の発表は11月24日（木）二次選考は12月3日（土）に所沢キャンパスで実施する。最終合格発表は12月16日（金）。募集定員は各学科若干名。

「論述試験」は「事前課題」での考察や実験に関連した出題で、初めて出会う問題に対して、限られた時間の中でいかに5つの力（CLEARの力）を発揮できるのかをみる。自分なりの考えを記述するが、斬新なひらめきによるものであれ、地道に積み上げたものであれ、合理性に基づいた説得力のある表現が求められる。課題へのアプローチ、観察と分析、仮説の立案と検証といった「科学する基本的態度」が評価される。入学後の人間科学部での伸びしろが評価されるのだ。

■FACTを新しい入試、入試制度の突破口に

（大学ジャーナルvol.121 早稲田大学人間科学部長、入試担当教務主任へのインタビュー記事から）

現行の、大勢の生徒が一度に受験する入試制度はいずれ立ちいかなくなくなると考えています。だからこそ、FACTであり新思考入試だと思います。ただ、その設計は難しく、これまでもAOなど、様々な制度がありましたが、それに置き換わるものは生まれていません。こうした中でFACTは、人間科学部として、これまでとは違うスタンダードを確立していくための一つのチャレンジと考えています。

一方、高大接続の観点からは、FACTの「事前課題」を高校での自由研究のヒントなどにも活用してもらいたいという願いを持っています。というのも、入学者の大学での学修状況を追跡調査すると、同じ入試問題をクリアしているにも関わらず、入学後に伸びる学生とそうでない学生との差が歴然と生じてくることがわかります。ではその差はどこから生まれるのか。同じことを教わったり体験したりしても、それを大きくできる、そこから展開できるためにはどのような力が関与しているのか。そしてこのような力は、いかなる教育によって高い水準で獲得されるのか。大学としては、いわばそのような思考力や展開力、創造性とでもいうべきものを入試で評価するような出題、選抜方法を工夫することが高校生へのメッセージになり、高大接続への端緒になると考えたのです。

このような考え方は、今後の入試改革にも引き継がれていくものですし、このFACT選抜で成果がみられれば、新思考入試も含めて新たな入試のかたちが確立していくでしょう。入試の多様化がよりすすむことで、結果的に社会に貢献してくれる人材の育成に寄与することを期待しています。

FACT選抜「事前課題」（抜粋）

以下の説明文（省略）にしたがって複数の実験を行い、それらの結果を総合的に踏まえたレポートを作成してください。

実験1：「トーストを落とすと、バターを塗った面を下にして着地する」ことを自身で確認する

（50回繰り返し、落下の様子を観察、記録する）

実験2：テーブルに伏せて置いたカード（トランプ）をテーブルの縁から落とした場合にカードのどちらの面が下を向いて着地するかについて確認する

（カードを落とす向きを変えて、それぞれ50回ずつ繰り返す）

実験3：「実験2」で得た結果を踏まえて、「トーストを落とすと、バターを塗った面を下にして着地する」確率が低下するように、「実験1」の条件を操作・変更する

（トーストの大きさ・厚さ、形状や落とす高さや、落とし方などを変えて、「バター面」が50回中18回以下になるような条件を実験によって探し出す）

レポート課題 A4用紙5ページ以上10ページ以内（表紙を除く）、図表・図解や写真などを効果的に使用したレポートを推奨する

参加者募集中

京都大学高校生フォーラム in TOKYO

数 楽 の 道 し る べ 。

2016.10.29 (sat) 14:00～17:45

会場：東京都教職員研修センター

主催：京都大学 東京都教育委員会

申し込みは各担任、進路指導部へ

Program

14:00 開会挨拶

14:10 在校生からのメッセージ

14:30 講演「楽しい数学・役に立つ数学」

京都大学高等研究院長・特別教授 森 重文

16:05 パネルディスカッション

17:45 閉会

校外で行われる「大学説明会」にも、より積極的に参加しよう！

女子生徒は「熱心に」進学情報を収集

レポート提出が課題だったこともあり、オープンキャンパスには4年、5年の全生徒が参加した。6年生でも夏期講習の合間に出かけた人も多いと思う。また、校外で行われる「大学説明会」に出かけた人もいた。こういった進学イベントを行っている大学新聞社では、参加した高校生を対象に「進学意識調査」を実施した。全国35会場でのアンケート結果をレポートする。

■学年が上がるにつれて志望大学を意識した相談

「本説明会ではどのようなことを相談したか？（複数回答可）」には、「学部・学科の特色」が67.1%と最も高く、次いで「入試制度」54.8%、「大学での勉強」38.7%、「オープンキャンパス情報」37.7%、「取得できる資格」25.6%と続いた。

一方、相談内容として最も割合が低かったのが、「留学制度」で8.7%だった。大学のグローバル化が叫ばれているが、受験生にとってはまずは入学することが先決ということなのでしょう。

回答を学年別に見てみると、「学部・学科の特色」が1年生59.3%、2年生67.3%、3年生69.5%と、学年が進むにつれて相談する割合が高くなっていった。これは、「入試方式」「就職情報」についても同様で、いずれも特定の大学や進学（候補）先をイメージしていると考えられるような具体的な質問項目だ。やはり、進路について真剣に意識し始める上級生の方が、身近なテーマに敏感になっている。

■オープンキャンパスは貴重な情報源

「大学・短大はどのような情報源から選ぶか？（複数回答可）」については、「オープンキャンパス」が71.5%でトップ。次いで「大学のパンフレット」61.3%、「高校内の説明会で聞いた大学担当者の話」32.9%、「大学のWebサイト」31.7%、「郊外の会場で実施する入試説明会」25.6%と続いた（グラフ参照）。

また、3位につけた「高校内の説明会で聞いた大学担当者の話」と5位の「郊外の会場で実施する入試説明会」などの「進路説明会」で大学・短大の入試・広報担当者と直接話ができる機会も重要な情報源の一つである。本校からの参加数はそう多くはないと思うが、出かけてみると盛況ぶりに圧倒されたこともある。

男女別にみると、回答選択肢のうち、男子が女子を上回ったのは「高校内の説明会で聞いた大学担当者の話」「友人の話」の2項目のみで、残りの13項目はいずれも女子の方が高かった。男子よりも女子の方が多くのチャンネルから進学（候補）先に関する情報収集をしている様子が伺える。

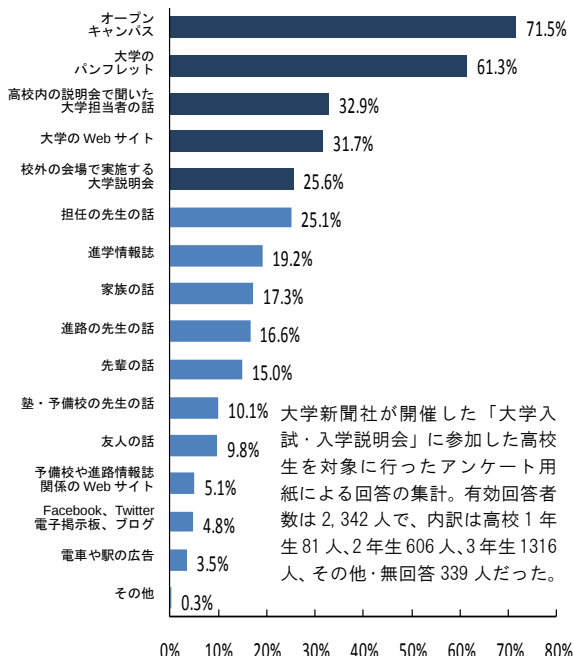
■オープンキャンパスでは「施設・設備」を重要視

「オープンキャンパスに行った際、次の項目についてどの程度重視するか？」については、『とても重視』『重視する』を合わせた項目でトップだったのは、「施設・設備」で93.3%。

以下、「模擬授業の内容」88.5%、「入試のお知らせ」85.2%、「大学の周りの環境」79.3%、「教職員」77.9%、「大学生スタッフ」65.0%、「当日の参加者」40.1%、「大学のグッズ」31.1%と続いた。

「施設・設備」が最上位となったのは、大学パンフレットやWebサイトだけでは十分に納得し理解するのが難しいからだと推察できる。オープンキャンパスで実際に確認したいという心情の表れなのだろう。また、「模擬授業の内容」も9割近い生徒が重視しており、模擬授業での体験が大学・学部選択に大きく影響しているようだ。

■大学・短大はどのような情報源から選ぶか？（複数回答可）



首都大で学部再編

平成 30 年度入試（現 5 年生受験年度）より

首都大学東京で平成 30 年度入試（現 5 年生が受験）より学部が再編されることは、既に第 37 号でお知らせした通りだが、9 月に説明会が行われたので詳しくレポートする。

大きな変更点は、現在の都市教養学部を廃止し、現在同学部を構成している 4 つの系を独立した学部にも再編するというもの。

下図に示すように、都市教養学部は、人文社会学部、法学部、経済経営学部、理学部の 4 学部にも再編される。

これによって、理工学系電気電子工学コースと機械工学コースはシステムデザイン学部にも組み込まれ、情報系分野と機械系の生命分野が強化される。

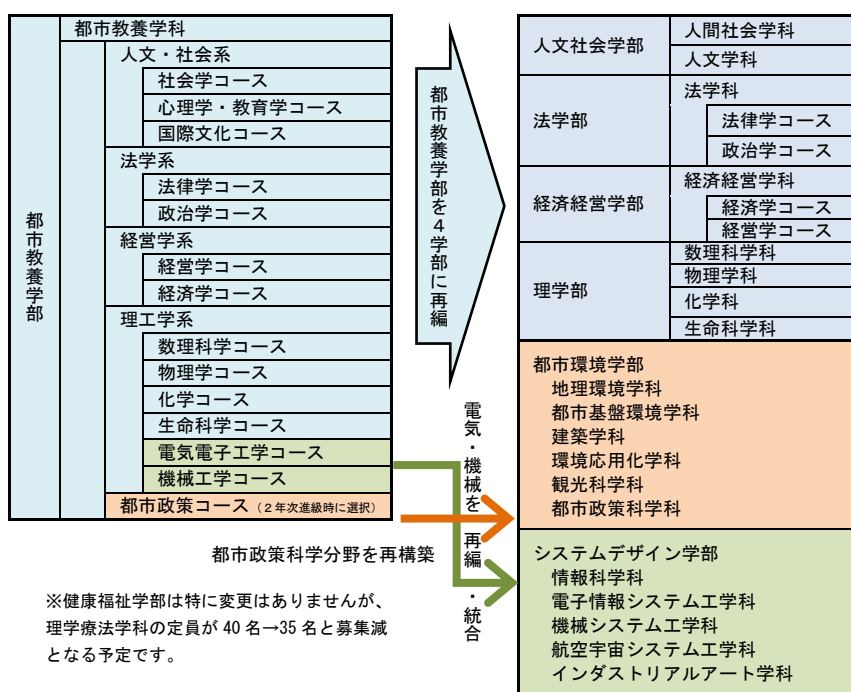
都市環境学部、システムデザイン学部は残るが、下図に示すように再編される。

注目点は都市環境学部にも増設される観光科学科と都市政策科学科である。

立教大学にも観光学部は設置されているが、首都大は観光科学科の名称通り、「理学的・工学的な知識と技術を用いて、現象解明から計画立案、観光振興の実践活動を支える技術者、コンサルタント、レンジャーなどの専門家、観光の総合的なマネジメントを行うことができる複数の専門性と豊かな発想力を身につけた実務的ジェネラリストなどを育成」することを目的の一つとしている。

また、都市政策科学科はこれまで募集は行わず、首都大入学生の中から 2 年次進級時にコース選択させていたものを新入生の募集から行う方式になった。アドミッションポリシー（求める学生像）をより明確にし、都市政策の現場で活躍できる人材を求めている。

また、都市政策科学科はこれまで募集は行わず、首都大入学生の中から 2 年次進級時にコース選択させていたものを新入生の募集から行う方式になった。アドミッションポリシー（求める学生像）をより明確にし、都市政策の現場で活躍できる人材を求めている。



学部再編の説明会で公開された内容は構想案で今後変更の可能性があるというものの、受験科目については大きな変更はないと思われる。これによれば、観光科学科は前期個別試験に数学Ⅲを含む理系学科である。地歴、理科に関しては、「地理 B、物基・物、化基・化、生基・生、地基・地」から 1 科目選択となっていて、理科必須でないところが、首都大観光科学科の特徴と思われる。

一方、都市政策科学科は前期試験において、文系区分 20 名、理系区分 10 名の定員となっている。理系区分では個別試験で数学Ⅲが必須、地歴・理科は「地理 B、物理、化学、生物、地学」から 1 科目選択となっていて、観光科学科と同様の科目指定である。文系区分は地歴、数学から 1 科目選択となっていて、両区分とも個別試験は 3 教科 3 科目型で行われる。

その他は大学 HP（<http://www.tmu.ac.jp/entrance/h30/index.html>）で詳細を調べることができる。